

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04131

研究課題名(和文) 評価することで「元気がでる」学生相談活動の新しい自己評価法の開発

研究課題名(英文) Development for new self assessment tools of Japanese college counseling centers activities

研究代表者

福盛 英明 (Fukumori, Hideaki)

九州大学・基幹教育院・准教授

研究者番号：40304844

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学生相談機関が日々の活動を肯定的にとらえて活動の見直しができ、未来展望を明確にできるツールである「学生相談プログラム充実イメージ表」を開発した。まず、CASの学生の学習・発達に関する16の学習成果をわが国に適合するように質的方法を用いて再分類した。次にエンパワメント評価を用いてアクションリサーチを行った。チームでの評価活動を行うことによって学生相談活動を振り返り、可視化され、機関にとって重要な活動が明確になり、モチベーションの向上につながることがわかった。最終的に「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ」プロトタイプ1.0を作成、試行調査を行いその結果を元に改良した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we developed a "counseling center program Enrichment Image Table", which is a tool that Japanese counseling centers can review their activities positively and to clarify future prospects. 16 learning outcomes on learning and development of students of CAS were reclassified using qualitative methods (KJ method) so as to be compatible with Japan. We conducted action research using empowerment evaluation. Through evaluation activities on the team, they reviewed their student counseling activities, visualized, clarified the activities important for the institution, and motivation was improved. We developed a "Student counseling comprehensive image assessment package", and we conducted trial survey and improved this tool.

研究分野：学生相談、カウンセリング、臨床心理学

キーワード：学生相談 自己評価 元気がでる 学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ 学生相談プログラム充実イメージ表 エンパワメント評価 発展段階

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景

社会に対する説明責任を果たしつつ、大学の自主性・自律性の尊重のためには、各大学における自己点検・評価の取組を充実・深化することは極めて重要であるが、学生の統合的学習の説明責任に答えるには、正課教育だけでなく学生支援に関するアセスメント(自己評価)も重要になってくる。

しかし、現在よく行われているような評価システムでは、重い作業負担と心理的なストレスによって、スタッフが評価に対する意欲が著しく低下するいわゆる「評価疲れ」が指摘されている。その原因は、限られた時間的・人的資源で実施するので負担が大きく、また成果の分析に注意が向きすぎていることであるとされている(田中,2009)。それは大学における評価においても共通であろう。その結果、基準をクリアすればよい、勧告をなるべく貰わないように、などの評価の形骸化がおき、評価そのものの導入への恐れが起きやすい。自己評価を導入して、組織がよりよい活動に向けて主体的にとりくみたくなる意欲が下がってしまうことは本末転倒である。このような状況を解決するためには、自己評価が単なる活動報告やユーザー満足度などの定量的結果にとどまらず、自己評価を行う者が主役となり、活動に発展のイメージを持って、未来に希望が持てることが重要である。つまり、日常業務で忙しい中でも取り組みやすくするために、できるだけ簡便で、現状分析にとどまらず、展望に希望がもて、評価後に「元気がでる」ような自己評価ツールの開発が待たれている。

(2) 筆者らのこれまでの取組

筆者ら(福盛ら,2014)は、アメリカ・イギリスのガイドラインを元にして、学生相談「機関」の充実をアセスメントするツール「学生相談機関充実イメージ表」を開発し(平成21年度～23年度科研費基盤研究(C)

「大学の学生相談充実における『発展段階モデル』の臨床心理学的研究」課題番号21530692)、論文化をおこなった(福盛ら,2014)。「学生相談機関充実イメージ表」は、学生相談機関が自らの組織の発展の状況を把握し、さらなる発展のためのイメージ形成を支援するという特徴をもち、自己評価の中でそれぞれの機関が「組織の位置づけ」「利用者への利便性」「人的資源」「相談の質の維持向上」の4領域において「充実していない」から「とても充実している」の5段階で評定でき、領域ごとにプロフィールとして視覚化することで、評価者自身が機関の現状を把握することが可能となった。

2. 研究の目的

自己評価では、機関の質保証と教育内容の質保証は分けられている(日本学術会議,2010)。本研究では、発展段階モデルを踏襲し、機関・プログラムの両面の自己評価に用いることができるツールを開発する。具体的には、発展段階モデルを基礎とした「学生相談機関充実イメージモデル表」開発のノウハウを活かし、新たに学生相談プログラムをアセスメントするツールを開発し、「機関」と「プログラム」の両方から学生相談活動をアセスメントできるようにすることである。

3. 研究の方法

未来展望を明確し自分達の活動を肯定的にとらえて学生相談の見直しできる学生相談プログラムの自己評価ツールを開発する。

学生支援を通じて促進すべき学生の学習・発達に関する学習成果を表したCAS(The Council for the Advancement of Standards in Higher Education)の「Frameworks for Assessing Learning and Development Outcomes」にある16領域(小貫,2014)に基づいて、我が国において実施されている学生相談プログラム事例(グループ活動、研修会・授業、活動事例)プログラム実践事例を収集しデータベース化を行う。

研究代表者・分担者の一部が ACPA (The American College Personnel Association) の年次集會に参加、最新 CAS の考え方に関する情報収集を行う。収集された事例を検討しながら分類し、CAS の示した各領域について 5 段階で充実度をイメージできるように評価・検討を重ねていき、「学生相談プログラム充実イメージ表」のプロトタイプを作成する。実際に協力大学を募り、試行調査を行い、信頼性・妥当性を検討し改良を重ね、最終版「学生相談プログラム充実イメージ表」を作成する。

これらを組み合わせ、「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ」とし、手引を作成する

4. 研究成果

(1) アメリカにおける学生相談・学生支援の自己評価-CAS とわが国の学生相談プログラム評価への適用可能性- [研究1]

1) CAS における視察調査

研究分担者ら(福盛・松下・池田・内野)は、2016年3月カナダで行われた ACPA 2016 の年次集會の CAS 関連のプレゼンテーションに出席し情報収集を行った。CAS による自己評価システムは、学生支援の専門的なサービスそれぞれを評価することができ、カウンセリングセンターも、学生支援活動の一つとして評価可能である一方、CAS が前提としている「学生の学習の成長・成果のモデル」が日本における学生の成長と合致するのかが疑問となった。また、わが国に適用するには、自分たちの活動を丁寧に振り返ることが重視されるように工夫すること、評価そのものへの恐れを低減し、できてないところを見つけるだけではなく「強み」を発見できるようにすること、などの評価手法の検討やツールの開発が必要になるとの知見を得た。これらの成果は福盛ら(2017)にまとめられた。

2) 「元気になる」学生支援・学生相談の自

己評価ツールを作成する際に留意すべき点

本研究によって明らかにしようとしている自己評価の方法は、従来で言えば形成的評価に位置づけられ(Rossi et al., 2004; 安田・渡辺, 2008)、評価の目的は、組織の改善に役立てるため、「アカウンタビリティ(説明責任)」より「改善」に重きがおかれていること、また、できるだけ短時間にわかりやすく可視化できるように工夫されるべきであるので、ループリックに似た手法を用いている、と位置づけられるだろう。これに加え、プログラム利用者への意識だけでなく、評価者の自己評価体験にフォーカスを当てる必要がある。

すなわち、わが国にあった評価ツールを作成する際に留意することは、自己評価の目的「評価の最も重要な目的は証明ではなく、改善である」の共有 自分たちの活動(成果だけでなくプロセスを含む)を丁寧に振り返り確認し俯瞰できることの重視 チームでの評価を行う際の良好なチームワークの醸成 エビデンスの収集に労力を割きすぎずに確認作業に役立つものとして位置づける 未来展望、発展のストーリー作りに寄与するものとする、などであった。

(2) 学生相談のプログラムを自己評価する「学生相談プログラム充実イメージ表」の試作と改良 [研究2]

1) 過去3年間の学生相談プログラム分析によるプログラム分類軸の検討

問題と目的

学生相談機関が提供するプログラム活動の評価について、川崎ら(2016)は、活動の特徴と評価方法との関連を明らかにしている。しかし、自己評価を行う際に機関の提供しているプログラム全体を自己評価する方法に決まったものはなく、実際の活動事例を見渡し、めざすべく学生の成長によって整理する分類軸が必要となるだろう。

アメリカの CAS の 16 の学習成果について

文化的に妥当なのか CAS は学生支援全般の学習成果と学生相談活動の学習成果の違いがあるのか、という理由から、わが国で CAS が適用できるかどうかは未知数である。そこで、過去の学生相談活動プログラム事例を収集し、まず CAS の学習成果領域で実際に評定してみることで、CAS がわが国の学生相談活動プログラムを分類するのに妥当かどうか問題点を明らかにし検討し、わが国に適合させるためには何が必要かを明らかにした。

方法

まず、研究分担者同士で議論を重ね、「学生相談プログラム」とは、正課外のワークショップなどのような、「学生相談機関が提供する、複数の学生を対象として計画的・組織的な教育的働きかけを行う企画」で学生対象の正課外のワークショップなどを指すことを確認した。平成 25 年～平成 27 年の日本学生相談学会大会論文集を元に実践事例を収集し、26 プログラムが抽出された。対象、プログラムのねらい、活動の実際、プログラム実施者・学生の視点からみた成果等一覧表にまとめた。4 名の評定者（学生相談経験 10 年以上の大学カウンセラー）によって、各プログラムが CAS の成長のどの領域のものかを評定した（複数選択）。

結果と考察

CAS16 の学習成果で「有意義な対人関係」に分類されるものが多く、評定されなかった領域はなかった。CAS 大項目による 4 名の評定について一致率（係数）を算出した。その結果、係数は 0.49、下位分類の係数は 0.43 であった。理由を検討したところ、CAS 領域は、カテゴリ階層間に不統一があり評定しづらかった、わが国の現状に合わない、などの問題があることがわかった。

KJ法(川喜田, 1967)を援用し、筆者のうちの4名がCASの16の学習成果領域の下位分類78項目をカード化し、似たカード同士に見出しをつけてグループ化し、グループ同士の関

係を図解化することで分類を行った。図解はアメリカのCASの分類とはかなり異なったものになり、わが国では、学業を修めること、他者との良好な関係や協働、自己理解、価値観、目標をもって生きる、キャリア形成、望ましい社会人としての社会参画などが抽出された。これらを見ても文化的な背景や社会制度がかなり影響を表していることが考えられた。学生相談において、わが国特有の学生の学習成長を記述する必要性が示唆された。その結果、10または7カテゴリーが採用されたが、より簡潔な学業を修めること他者とよい関係をもち協働する自己を理解し・価値観をもって生きる望ましい市民として社会に参画する目標を持って生きるキャリアを形成する健康的な行動、の7カテゴリーで分類することを提案した。

2)「学生相談プログラム充実イメージ表」の構成の試作と改良

複数の試作表を作成・改良し「学生相談プログラム充実イメージ表」(プロトタイプ 1.0)を作成した。

(3) 評価者自身をエンパワメントするチームによる自己評価手法の検討 [研究3] 問題と目的

形成的評価には、評価者が当事者と独立して計画を立て、エビデンスに基づいた独立評価を行うことはアカウントビリティ（説明責任）などから重要であるが、結果をまとめることそのものが目的となりがちで、その先の活動やプログラムの改良などに十分結びついていないこともしばしばである。

しかし、独立評価が常に適切であるという前提に疑問を差し挟んだ自己評価の方法の一つに、エンパワメント評価(以下 EE)というものがある。アクションリサーチに影響を受け、Fetterman によって開発された手法であり、目指すところは「改善と自己決定の促進のための評価の概念、技術、結果の活用」とされている (Fetterman &

Wandersman, 2005)。その特徴は、活動にかかわっている当事者のグループ討議による自己評価であること、実践と評価が円環的に行われることによって、活動当事者自身がエンパワーされ、活動プログラムが改良されることがあげられる。この手法を用いて、学生相談活動を自己評価することを試みにを行い、それを考察することを目的とした。

方法

研究協力をしていただける3つの大学にEEのファシリテーター等を務める研究グループ4名が訪問し、各大学の学生相談活動の評価を行った。評価活動はFetterman & Wandersman (2005)のEEの手続きに沿って行われた。参加者はA大学6名、B大学5名、C大学9名であった。

結果と考察

評価前後にSD法による気分、「評価」という言葉へのイメージ、体験(自由記述)を回答してもらった。

EEについての5項目の評価平均点が3.8~4.7(5点満点)であり、直接的に元気が出た、というよりは、楽しかった、課題が明らかになった、仕事の視野が広がったという回答が多かった。また「相談室・談話室をもっとよくしていこうというモチベーションが高まった」などの感想から、エンパワーメントされた状態が示唆されていた。「評価」という言葉のイメージについて、セッション後は全体的に肯定的なイメージを選択していた。特に固さや冷たさ、こわさ、軽さ、楽しさ、親しみやすさ、自由さ、などが変化していた。チームでの共同作業の手法を用いるEEのエッセンスは、わが国の「評価」を恐れる文化の中で形成的な自己評価を行う場合に有効な手段となりうることが示唆された。

EEを通じて学生相談活動の自己評価をすることの意義には、以下の可能性があると考えられた。1)活動の洗い出しによって学生相談活動を可視化し、その評価を通じ、機関

にとって重要な活動が明確になる。2)評価すること自体を肯定的にとらえ、自分および機関の活動について新たな気づきを得られる。3)活動に対するスタッフの考え方や価値観、評価などの類似点と相違点を共有しながら、互いを尊重し信頼する。4)できていないことは課題として認識し、活動をもっとよくしていこうというモチベーションの向上につながる。

以上のことから、チームで評価を行うことが活性化をおこすかもしれないワークショップなどで評価者同士が話し合うことによって活性化をおこすかもしれない、という仮説が考えられたので、手引作成にこの点を活かしていくことにした。

(6)「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ」と手引の開発[研究4]

問題と目的

これまでの知見を用いて、「学生相談機関充実イメージ表」と「学生相談プログラム充実イメージ表」などを含む5つのモジュールからなる「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ」プロトタイプ(1.0)を開発し、評価の手引を作成した。課題と改良点を同定するために、開発されたパッケージ(特に新しく開発した「学生相談活動プログラム充実イメージ表」)を実際に使用してもらい回答を求めた。

方法

学生相談のプログラムを提供している学生相談機関に所属するカウンセラーを、研究分担者にノミネーションしてもらい、「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ(プロトタイプ1.0)」の記入シート(エクセル版)に記入、評価用紙に試用コメントと改善点を記入してもらった。

結果と考察

回答機関は17大学(機関)であり、回答には、「振り返りのいい機会になった」という意見が複数あった。このツールによって、

日常の活動をある基準に基づいて可視化することによって、課題などが浮かびあがってくる、という体験をしたとの記述があった。また、「ステップ1から順々に問いかけに対し答えていくことで、1つ1つ丁寧にプログラムの立案から成果・課題まで振り返ることができる」などステップごとに記入していくと、評価ができることも好意的に受け止められているようであった。「報告書などでも活用できそう」という記述があった一方で、構造の問題、技術的問題などの課題が浮かびあがったので改良をし、「学生相談活動充実イメージアセスメントパッケージ(2.0)」を完成させた。

(7) 今後の課題-研究の発展

今後、より多くの機関の自己評価に活用してもらい、改良を重ね、十分なエビデンスを得ることが重要になるだろう。

試行調査において、それぞれの学生相談機関に直面している課題・学生相談の組織が置かれている状況などがあることがわかり、ツールを用いて自己評価することだけで単純に元気がでる、というのは楽観的すぎるのかもしれないことが明らかになった。しかし、評価者が孤立せずオープンに話し合え相互援助を行うようなしくみがあることによって、評価に関するイメージをポジティブにでき、エンパワメントできる可能性もある。

また、現在アメリカでは、学生相談においてはさまざまなテクノロジーが活用されている(福盛ら,2018)。今後、この評価法を発展させ、評価者がより包括的・簡便に学生相談活動を評価し、結果を他大学の現状と即時的に比較しつつ可視化することを可能にするために、テクノロジーを活用することが考えられる。今後の研究課題としたい。

付記

公刊していない研究成果については順次継続して論文化してゆく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1) 福盛英明・松下智子・内野悌司・池田忠義・高野明・大島啓利・山中淑江 2017 アメリカにおけるCASによる学生相談・学生支援の評価-わが国の学生相談プログラム評価への適用可能性-,九州大学学生相談室紀要,3,73-80. [査読なし]

2) 福盛英明・高野明・松下智子 2018 学生相談とテクノロジー~アメリカと日本の学生相談におけるテクノロジー活用に関する新しい動向~,九州大学学生相談室報告書・紀要,4,83-91. [査読なし]

[学会発表](計2件)

1) 福盛英明・山中淑江・高野明・大島啓利・池田忠義・内野悌司・松下智子 2017 学生相談プログラム評価に資する分類軸の検討 過去3年間の学生相談プログラム分析,日本学生相談学会第35回大会発表論文集,p90. [査読あり]

2) 内野悌司・福盛英明・池田忠義・松下智子・山中淑江・大島啓利・高野明 2017 エンパワメント評価を用いた学生相談活動の自己評価の試み,日本学生相談学会第35回大会発表論文集,p91. [査読あり]

[その他]

1) 本研究の研究成果について、pdf版の成果報告書(未公開:第1版106ページ)を作成した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福盛 英明 (HIDEAKI FUKUMORI)

(九州大学基幹教育院・准教授)

研究者番号: 40304844

(2) 研究分担者

内野 悌司 (TEIJI UCHINO)

(広島修道大学・教授)

研究者番号: 00294603

山中 淑江 (YOSHIE YAMANAKA)

(立教大学・カウンセラー)

研究者番号: 10267388

松下 智子 (TOMOKO MATSUSHITA)

(九州大学・准教授)

研究者番号: 40618071

大島 啓利 (HIROTOSHI OSHIMA)

(広島修道大学・カウンセラー)

研究者番号: 90617317

池田 忠義 (TADAYOSHI IKEDA)

(東北大学・教授)

研究者番号: 70333763

高野 明 (AKIRA TAKANO)

(東京大学・准教授)

研究者番号: 50400445